

三愛精神

人を愛し 国を愛し 勤めを愛す

リコー三愛グループ創業者 市村 清

西郷隆盛は「天を敬い、人を愛す」と言った。私は、あえて「三愛」と言う。

あの有名な西郷さんとくらべられたいとは思わないが、「人を愛し 国を愛し 勤めを愛す」という三愛精神は、私の生涯の信念である。

人間は万物の霊長といわれるが、人間ひとりひとりの価値は、人によって見方が異なる。学者が偉いと思う者もいるし、政治家、芸術家、財界人のほうが偉いとする考え方もあろう。そのいずれにもせよ、真に人間の偉さを決定するものは、その人の持つ「愛」の深さと広さではないだろうか。

すべての動物に自己保存があるように、人間も本能的に自己を愛する。下等な人間でも、自分だけは愛している。平凡な人間になると、妻子を愛し、両親を愛し、兄弟を愛する。すこし上等な人間になると、隣人愛にめざめ、次には民族を愛し、祖国愛となり、さらに進めば世界の全人類を愛する。それがなおも徹底すれば、すべての動植物、ありとあらゆるものを自分と同じように愛し、ついには自己以上に愛するようになる。そのためには、自分を犠牲にしても

惜しくない大きな愛の高まりにまで徹する。

この境地は、すでに仏であり神であらう。お釈迦さまやキリストがそれである。このように、愛の深さと広さが、どのくらいの段階に達しているか、それがその人間の本当の価値を決定するものであると確信する。

「愛」の精神は、すでに多くの偉人たちが説いている。しかし、私はあえて「三愛」の旗をかける。「三」とは何か。古典には「一は二を生じ、二は三を生じ、三は万物を生じる」とある。けれども字引に「三愛」とは出ていない。三愛は私の発見であり、同時に絶対の信念である。

私の提唱する三愛主義とは、人を愛し、国を愛し、勤めを愛する精神であるから、世界人類の一員として、まずすべての人を愛すること。日本人としては、祖国日本を愛すること。そして自己がこの世に生をうけた意義を果たすため、自分にあたえられた任務を愛して一生懸命にはげむこと。

三愛主義こそ唯一救国の大道である。日本の全国民が三愛の精神に燃えたつならば、日本国

はますます栄えると信じる。

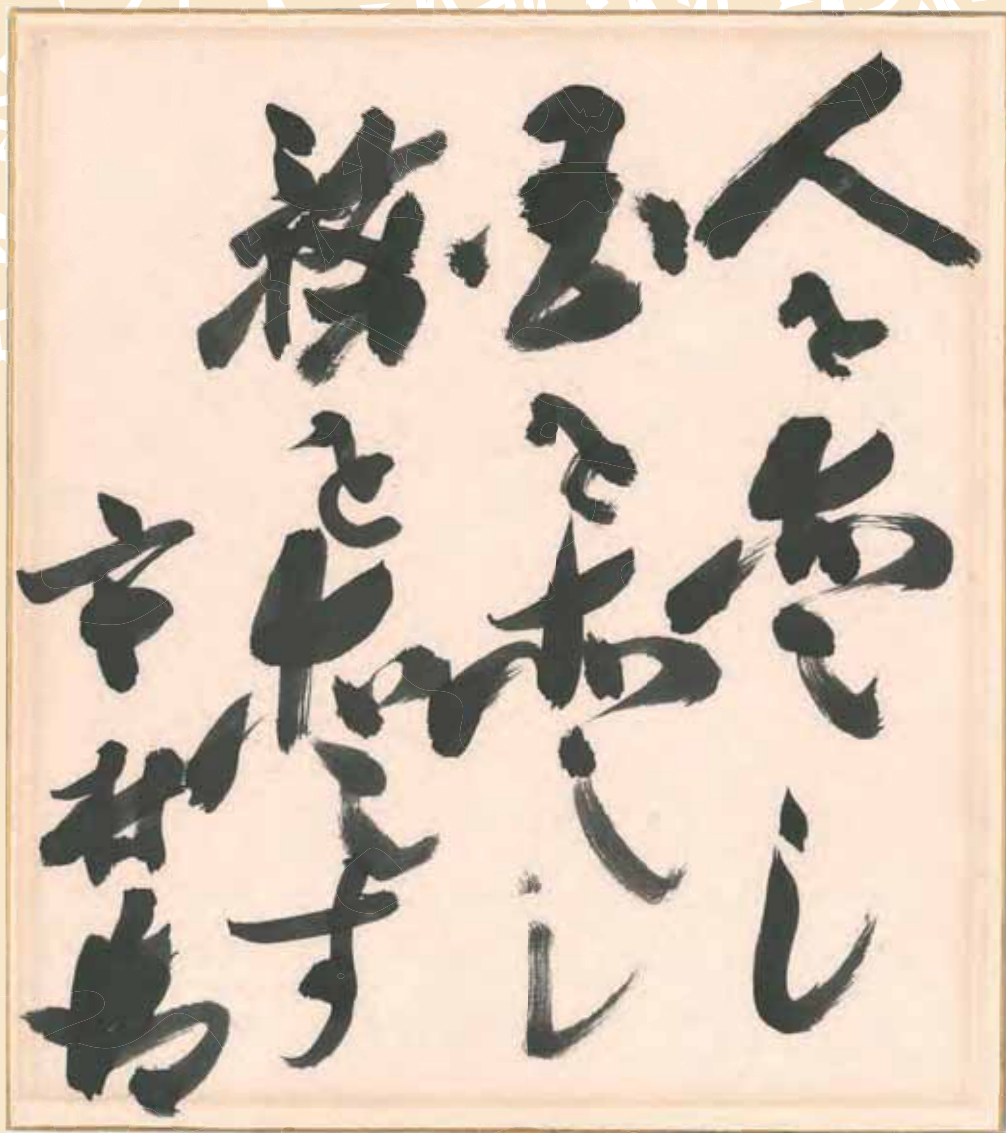
「三は万物を生じる」の三愛精神は、どのような場合にも通用する。事業について言うならば、社員を愛し、資本を愛し、事業そのものを愛する。利益があれば、社員と、資本と、事業全体の運営改善のために、それを三分して使う。

教育について言うなら、教師を愛し、生徒を愛し、学問そのものを愛することである。生活を楽しむなら、衣、食、住を心から愛するがよい。

自己を磨くときは、過去を反省し、現在を努力し、未来に希望を抱いて、そのすべてを愛し感謝する。

私はかねてから、この三愛の精神を信じ、三愛主義と名づけて、それを生涯の念願として実行してきた。事業の上でも「三愛」を商号とするのは、いよいよ自己の信念に忠実でありたいと願うからである。

私の愛してやまない社員諸君、今後とも三愛の精神に徹して、日本の発展に全力を傾けようではないか。



市村 清 揮毫（昭和 35 年 5 月 23 日 社長室において）

1946（昭和21）年12月、「三愛精神」発表当時の日本は、都市のほとんどが焦土と化しておりました。衣食住のすべてに困窮していたとき、機関誌を出すなどは、およそ常人には及びも付かないことでした。

しかし、市村清はわずか16ページの粗悪なザラ紙の雑誌ではありましたが、日本の復興と未来の発展を信じ、リコー三愛グループの機関誌『三愛』を創刊、その誌上にかねてより温めてきた自らの人生哲学ともいうべき論文を掲げたのです。ときに創業者・市村清46歳でした。

発表された「三愛精神」は文語体、旧字体などで記された格調高い文章ですが、難読であるため、1987年、「読みやすい三愛精神」として現代の文体で著されました。

三 愛 会